

(続紙 1)

| | | | |
|---|--|----|-------|
| 京都大学 | 博士(人間・環境学) | 氏名 | 土田 陽子 |
| 論文題目 | 公立名門高等女学校にみるジェンダー秩序と階層構造 —— 県立和歌山高等女学校の事例から | | |
| <p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、都市化と産業化が本格的に進展していく大正期から昭和戦前期に焦点をあて、主に和歌山県立和歌山高等女学校(以下、和高女という)を取りあげながら、高等女学校におけるジェンダー秩序の形成とそこにみられる階層構造を考察したものである。</p> <p>まず第1章「和歌山市の近代都市化と女学校利用層の変容過程」において、和歌山県における高等女学校の拡大過程が概観された後、和高女利用層の特徴とその変化が、生徒個票データに基づきながら解明されている。それによれば、和高女には和歌山市南部の旧武家地跡に住む士族や近代的職業層の娘が多く通っており、その背景には、市街電車の開通による旧武家地跡の郊外住宅地化と文教地区化という町の構造変化があったという。</p> <p>ついで第2章「新聞メディアにみる学校イメージ」では、『大阪朝日新聞 和歌山版』を分析素材としながら、和歌山市内に存在していた3校の高等女学校と中学校との学校イメージが描き出され、高等女学校間の差異化・序列化の構造が明らかにされている。中学校に関する新聞記事はスポーツ記事が中心であったが、高等女学校に関する新聞記事は、高等女学校のめざすべき方向性やその教育方法など多岐にわたっており、国家や社会が期待する女学生像が提示されていた。また新聞で取り上げられる各高等女学校の記事数や内容には違いがあり、それらを通して人々は各高等女学校が置かれている社会的な位置関係も知ることとなった。これらの新聞記事から明らかになる和高女の学校イメージの特徴は、歴史の古さと県内唯一の5年制高等女学校という優位性のみならず、中央との関係性の強さや学力の高さ、質実剛健な学校文化、西洋芸術文化との親和性に示された階層性の高さなどであった。これらの要因が、高等女学校間の序列のトップにあった和高女の威信を支えていたことが指摘されている。</p> <p>第3章「学校文化と生徒文化の特徴と構造」では、生徒の出身階層と深い関係がみられる「出身小学校」による和高女生のグルーピングを行い、質問紙調査とインタビュー調査の分析を通して、和高女の学校文化の形成過程と特徴、及び学校文化とその下位文化にあたる生徒文化との関係性が明らかにされている。その結果、和高女の生徒集団の中で主流派ともいえるグループを形成していたのは、業績主義的な価値規範と文化的正統性をもつ西洋芸術文化との親和性が高い、新中間層家庭の多い小学校出身者たちであったという。</p> <p>第4章「模範生徒にみるジェンダー規範の特徴」においては、和高女と和歌山中学校の正級長・副級長に対する生徒評価に着目することで、いかなる生徒が学校側から模範生徒とみなされていたのかが考察されている。具体的には、両校の正級長・副級長の「成績簿」に記載されている、「出身階層」「学業成績」「体格評価」「人物評価」を分析し、高等女学校と中学校におけるジェンダー規範の共通点と差異が検討されている。それによれば、「学業成績」に関していえば、男女の正級長・副級長のほとんどが成績順位上位者で占められており、男女ともに変わりがなかった。しかし「出身階層」では、女子の場合は近代的職業層や富裕層から多く輩出されているなど、家庭の文化的要因の影響が大きかったのに対して、男子の場合はそのような傾向はなかった。また「人物評価」</p> | | | |

に関していえば、男女ともに、活動性や快活さ、勤勉さや責任感など、男性的ともいえる要素がプラスの評価に、控え目、従順、内気などの女性的な要素はマイナス評価につながっていた。しかし他方で、男子には組織への忠実さや人よりも優れた点をもっていることが、女子には周囲への気配りや愛嬌など人間関係を円滑にする資質が期待されており、立派な体格は男子にのみ求められるなど、男女による相違も存在していた。つまり名門高等女学校の世界は、男子とも共通する能力主義・業績主義的な規範と、親密で良好な家族関係を重視する近代家族の運営に適合的なジェンダー規範という、矛盾を孕む複雑な評価基準によって構成されていたことになる。

第5章「あるべき卒業生像」では、「同窓会誌」と新聞メディアを使いながら、和高女とその同窓会組織が望む卒業後のあり方や和高女卒業生に対して向けられる社会のまなざしが検討されている。その結果、古くさい因習にとらわれた生活から脱却して、近代国家を支えるにふさわしい最新知識と国家意識をもった中流以上の家庭の主婦になること、そのための研鑽や修養を積むこと、他者のために献身的に尽くし、社会的に意義ある奉仕活動を行うことが期待されていたことが明らかになったという。

最後に終章「公立名門高等女学校という存在とジェンダー秩序」において本論文のまとめが行われている。すなわち、第一に近代的なジェンダー秩序は、基本的には政府の方針に従いながら、決して上からの押しつけだけでなく、学校現場とメディアの双方向的な関わりあいの中で形成され、人々に共有されていったこと、第二には、各高等女学校が示す女学生像には、学校間の序列と生徒の社会階層に対応する差異が存在しており、近代日本の中等教育機関は、男女をそれぞれの性別にふさわしい存在として教育していただけでなく、女学生同士を差異化・序列化する社会装置でもあったことが指摘されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、都市化と産業化が本格的に進展していく大正期から昭和戦前期に焦点をあて、主に和歌山県立和歌山高等女学校(以下、和高女という)を取りあげながら、高等女学校におけるジェンダー秩序の形成とそこにみられる階層構造を考察したものである。

この問題は、これまでの女子教育史研究において、良妻賢母思想研究、女学生・少女・主婦に関する表象研究、高等女学校の実態に関する研究として進められてきた。それに対して本論文は、地域の近代化プロセスにおける社会階層の再編と、高等女学校が産出する近代的なジェンダー秩序の確立、及び両者の関係を、「学校」「生徒(家庭)」「マスメディア」の三者のダイナミズムに注目しながら、実証的に明らかにしようとしている。そのため本論文では、当時の行政史料や新聞記事のほか、「学籍簿」「成績簿」「同窓会誌」などの学校史料、さらには卒業生に対するアンケート調査・インタビュー調査など、多種多様な一次史料が駆使されている。本論文の特徴は、和高女に徹底してこだわりながら、和高女を軸として和歌山市内の他の高等女学校や中学校との比較も行った点にあり、地域全体の学校状況を視野に入れつつ、和高女の教育が分析されている。その結果、先行研究では明らかにされてこなかった、高等女学校における多面的・立体的なジェンダー秩序の形成の解明に成功しており、それは単なる地域史研究を超えた知見となっている。この「学校」「生徒(家庭)」「マスメディア」の三者のダイナミズムへの注目という新しい視点と、多種多様な一次史料の駆使という点に、本論文の第一の研究上の意義があると考えられる。

第二に指摘できる本論文の研究上の意義は、このような史料を駆使しながら、高等女学校が女学生同士・女学校同士を差異化・序列化する社会装置であったことを明らかにしたことである。中学校に在学している男子に求められているジェンダー規範は、成績がよいこと、積極的・活動的であること、体格がよいことなどであり、ある意味、わかりやすいものである。それに対して高等女学校に在学している女子へのジェンダー規範は複雑である。たとえば、男子と同じく成績がよいことは必要であるが、上品さや従順さ、他者への配慮といった「女らしさ」も女子には必要となる。このような複雑な女子に対するジェンダー規範を、本論文は和歌山市内に存在した3校の高等女学校間の序列と生徒の社会階層、各高等女学校の良妻賢母教育の内容、和高女における模範生徒の分析を通して、解明している。その結果、和高女は業績主義・能力主義という近代以降の男性に求められる価値規範、武家文化・西洋文化という文化的な卓越性、そして階層性の高さによって他校と差異化され、序列の上位におかれていたこと、それに対して、和高女の成績下位層や和高女以外の2校には、女性的ともいえる性質や人柄を重視する価値観や、家事技能に関する実用的な教育が存在していたことが、本論文では述べられている。高等女学校には中流以上の階層の女子が進学していたが、そこには近代以降に再編された各社会階層に応じた複数のジェンダー規範が内包されており、高等女学校間だけでなく、高等女学校内においても、このようなジェンダーに関する階層分化が存在していたことが、本論文によって明らかになったといえるだろう。

第三に指摘できる本論文の意義は、「学校」「生徒(家庭)」「マスメディア」の三者のダイナミズムに注目するという視点によって、期待される女性像や各高等女学校の社会的位置関係の形成のありようが解明された点にある。つまり、

高等女学校教育を通して性別分業に基づく近代的なジェンダー秩序が形成されていく場合、それは基本的には政府の方針に従いながら行われるものではあるが、決して「上からの(中央からの)」押しつけだけでなく、学校現場とマスメディアの双方向的な関わり合いのなかで形成され、地域一般の家庭の人々にも共有されていたということが明らかになったのである。

これら三点において、本論文は従来の子教育史研究に新たな知見を拓いたことができるが、高等女学校教育と旧中間層の階層文化との関連性など、これからさらに解明すべき課題が存在している。しかしながら、この不十分点にもまして本論文は研究上の大きな意義を有しており、人間形成過程における社会化の問題を解明することをめざす、共生人間学専攻人間社会論講座人間形成論分野の理念に適った論文であると考えられる。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年11月30日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降